専門医症例報告

上顎両側遊離端欠損に対して金属床義歯を用いて機能回復を図った症例

木村尚美

A case of prosthetic rehabilitation using a metal plate denture for distal extension defect

Naomi Kimura

抄 録

症例の概要：患者は64歳男性。補綴装置による違和感および上顎臼歯部欠損による咀嚼障害を主訴に当科を受診した。これまでにレジン床義歯を三度製作していたが、補綴装置による違和感のためいずれも使用できなかった。

新義歯製作に先立ち、熱可塑性樹脂にて口蓋床を製作。新製義歯の口蓋形態を模索し、前後パラタルバーを用いたCo-Cr製の金属床義歯を製作し、主訴の改善を図った。

考察：金属床義歯を製作した義歯により、患者の満足が得られた。術後4年を経過したが、義歯の安定は損なわれず経過は良好であった。

結論：両側上顎臼歯部欠損症例に対し、大連結子の選択に配慮し、金属床義歯を適用して、良好な結果を得た。

キーワード

大連結子、金属床義歯、遊離端欠損

ABSTRACT

Patient: A 64-year-old male was referred to us complaining of discomfort regarding prosthetic treatment and difficulty of mastication due to bilateral missing molar teeth in the maxilla. Although he had tried dentures with a resin palatal plate three times, he could not wear them because of discomfort due to palatal coverage. First, a palate plate of thermoplastic resin to examine the shape of the plate was made. A metal-based denture made of Co-Cr was fabricated and oral function was improved.

Discussion: The application of a metal-based denture with a customized major connector resulted in patient satisfaction, and stability of the RPD was maintained for four years.

Conclusion: A bilateral distal extension metal-base denture considering the design of the major connection was fabricated for a male patient.

Key words:

Major connector, Metal plate denture, Distal extension missing

I. 緒 言

義歯装着後の初期症状として違和感を訴えることは往々にしてある。通常、義歯調整を行い、経過観察していると数か月で違和感は消失することが多い¹⁾

しかしながら、違和感や味覚障害、嘔吐反射などの違和感を訴え、装着を断念することもある。

本症例の患者は違和感の少ない義歯を希望し、上顎両側遊離端欠損の患者に前後パラタルバーを用いた金属床義歯にて機能回復を図り、良好な経過を得たので報告する。

愛知学院大学歯学部有床義歯学講座

Department of Removable Prosthodontics, School of Dentistry, Aichi Gakuin University

受付：2018年11月27日／受理：2019年5月29日

Received on November 27, 2018/Accepted on May 29, 2019

図 6 Occlusal force measurement and masticatory ability score
機能評価および咀嚼スコア

直的顎間関係の記録を再度確認した。咬合採得 3 回目にて水平的顎間関係の記録。ゴシックアーチ描記法にて確認した結果、習慣性咬合位とアベックスが一致したため習慣性咬合位にて咬合採得を行った。ろう義歯の試適を行い、2012 年 8 月に Co-Cr 製の金属床義歯を装着した。

新義歯の適合状態は良好で、装着感も患者の満足が得られた。その後は 3 か月に一度リコールをしていたが、装着 4 年 1 か月後に人工歯の破損を認めたため、コンポジットレジンにて修理を行った。装着 4 年 4 か月後に 5) 二次カリエスを認め、同歯はインレー修復処置を行った。

術後 5 年 (図 4, 5) を経過したところで、当診療科の方法に従って、咀嚼機能評価と VAS 法を用いた義歯の満足度調査を行った。術後の機能評価では咬合力は 245.8 N、グミゼリーによる咀嚼値は 2514.9 mm²、咀嚼スコアは 100 ポイントを示し、いずれも術前に比べて高い値であった (図 6)。義歯の満足度でも術前よりも良好な結果を得た (表 2)。

IV. 考 察

嚥下や発音機能が円滑に行われているとき、舌を巧みに口蓋に接触させることで円滑に機能させており、口蓋と舌の接触、歯槽部を含む上顎義歯口蓋部の研磨面形態は重要であるという報告がある³⁾。

患者は過去 3 回レジン床義歯を製作したが、違和感が強く、使用困難だったという経緯があり、今回は大連結子の設計に配慮し、金属床義歯を製作した。

設計では支台装置に加えて、2) に設置したフックや 1) 部の中間歯欠損部を残存させたことにより把持効果が高められ、義歯が安定し、術後経過に影響を及

表 2 VAS based on questionnaire about prosthesis
義歯に対する評価 (VAS)

	術前	術後
義歯の装着感	14	79
義歯の安定性	15	89
食べやすさ	8	78
痛み	23	83
しゃべりやすさ	45	93
のみこみ	44	96
見た目	46	94
総合的な義歯の満足度	15	93

ぼしたと考える。また、ゴシックアーチ描記により、習慣性咬合位とアベックスが一致し、この位置で義歯を製作した。これは中心咬合位と義歯による咬頭嵌合位とを一致した補綴装置を製作したことになり、術後に影響していると考えられる。

本症例は対合歯がすべて天然歯列であり、上顎義歯と床下粘膜、支台装置にかかる応力は高く、今後も短い間隔での定期検診が必要と考える。

V. 結 論

本症例では、補綴装置による違和感および上顎臼歯部の欠損に対して、口蓋床を用いた検査を行い、部分床義歯を適用し、患者の主訴や咀嚼機能を十分に回復することができた。

文 献

- 1) 藍 稔, 五十嵐順正, 石上友彦, 大川周治, 大久保力廣, 尾澤昌悟ほか. スタンダード部分床義歯補綴学. 東京: 学建学院; 2006, 217-218.
- 2) 浅見和哉, 宮前 真, 尾澤昌悟, 吉岡 文, 岡崎祥子, 平井秀明ほか. 上顎顎義歯症例における咀嚼能力評価に関する検討. 顎顔面補綴 2010; 33: 7-14.
- 3) 木内延年, 河野正司, 池田圭介, 道見 登, 植田耕一郎. パラトグラム舌運動機能診断法をもとにした舌接触補助床による摂食嚥下障害者の治療. 補綴誌 2003; 47: 135-144.

著者連絡先: 木村 尚美

〒464-8651 名古屋市千種区末盛通 2 丁目
11 番地

Tel & Fax: 052-759-2152

E-mail: kimunao@dpc.agu.ac.jp